

大規模災害復旧事業を契機としたコミュニティデザインに関する一考察

日本大学大学院 学生会員 ○大森 真央
日本大学 正会員 永村 景子

1. 背景・目的

近年、地震や津波、豪雨、火山等の大規模災害が頻発しており、その復旧・復興は時間経過に沿って、対応すべき課題が異なる。復旧においては、被害にあった地域のハード整備が急がれ、同時にソフト整備も実施している。復興を考える上では、地域コミュニティの存続、形成が重要である¹⁾。国土交通省でも平常時における、地域コミュニティの持続性についての懸念を提示している²⁾。このように、今後の地域存続のために、地域コミュニティが重要である。また、社会的動向として少子高齢化、若者の都市部への転出が問題となっている。この打開策として、内閣府では若者に IUJ ターンを促すために、高校生に地域での取り組みに参加させることを推奨している³⁾。これらのことから、地域コミュニティの持続性を高めるために、地域の若者に活動の場を提供し、参加を促すことが重要だと考える。

本研究は、災害が発生してから10年以上経過している地域において、災害復旧事業から復興期に移行する過程で展開してきた地域づくり活動を対象にアクションリサーチを実施するものである。具体的には、2006(平成18)年に豪雨災害を経験した鹿児島県伊佐市にある鹿児島県立大川高等学校と実施している地域活性化プロジェクトを対象とする。当該地域活動は現在、ソーシャル・キャピタルの醸成により、若者が地域へ関心を持ち、主体的に動く地域貢献活動が可能なコミュニティデザインへと展開している。

本稿では、2006(平成18)年から現在までの地域づくりに至った経緯を記録・整理するとともに、筆者らが2016(平成28)年以降に介入している若者による地域課題解決プロセスの効果を検証することを目的とし、アンケート調査及びその結果の分析、考察を行う。

2. 災害から現在までの取り組み

2006(平成18)年に薩摩地方北部を中心とした豪雨災害が発生した。その際川内川流域では、河川の氾濫や土

砂災害により、浸水被害が多発した。鹿児島県伊佐市曾木の滝周辺地域では、河川激甚災害対策特別緊急事業として国土交通省河川整備事務所による曾木の滝分水路整備(復旧事業)が行われ、2011(平成23)年に竣工した。

復旧事業竣工を目前に控えた2010(平成22)年度から現在に至るまで、当該地域の自治体(伊佐市)、高等学校、NPO、地域コミュニティ、任意団体らと連携し地域づくりを実施している。2011(平成23)年度から3回実施された「曾木はっけんウォーキング」は、NPOを中心とした運営チームとともに開催したイベントであり、曾木の滝分水路を含む曾木の滝周辺地域を歩くものである。活動主体の高齢化が進む中、第3回曾木はっけんウォーキングでは、若い人材が参画するイベント開催を企図し、鹿児島県立大川高等学校の生徒と一緒に運営することとなった。このイベントが実績となり、翌年以降も若者たちを地域と協力して、地域貢献活動を行う場を継続的に設けるために、伊佐市最大級の祭りである第54回もみじ祭りから高校生プロデュースの祭りを実施することとなった。

上記で示したこれまでの取り組みは、3つの時期に分けることができる(図-1)。①災害直後から曾木の滝分水路の供用が開始されるまでの「事業計画策定期」、②曾木の滝周辺地域活性化検討会が発足し、高校生が参画始めるまでの「まちづくり期」、③高校生の参画が本格化した「地域管理期」の3つであり、現在は「地域管理期」にあたる。

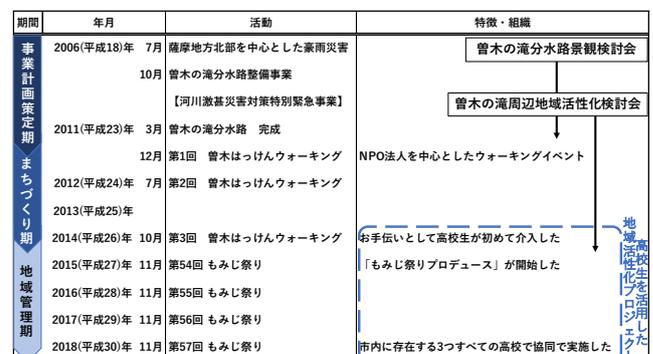


図-1 現在までの活動フロー(筆者作成)

キーワード コミュニティデザイン、大規模災害復旧事業、高校生、アクションリサーチ、地域活性化

連絡先 〒275-8575 千葉県習志野市泉町1-2-1 日本大学生産工学部 TEL:047-474-2201 E-mail:cimal7004@g.nihon-u.ac.jp

